

アーサー・ビナードさんと憲法を考えよう

11月23日(祝)九条の会講演会

～一流の憲法と三流の政治の不思議な国ニッポン！～

野田・九条の会では毎年11月に講演会や映画会を開いてきました。

今年はアメリカから22年前に来日し、日本語で詩を書き、出版し、最近では講演やラジオの出演で原発や憲法について発言をしているアーサー・ビナードさんに講演をお願いしました。最近の憲法を変えようという動きに私たちはどう對抗して言ったらいいのか、外国人から見た日本国憲法のすばらしさを聞いてみようかと企画しました。アーサー・ビナードさんは、九条の会事務局長の小森陽一さんとの対談の本の中で、「権力者が使っている言葉や報道で使われている言葉と、現実とのギャップをどうやって認識して、言葉を市民の力で現実の方にぐ

「けやき九条の会へいらっしやいませんか

今朝のテレビが、陸上自衛隊と米海兵隊がグアム島で、敵に占拠された島の奪還を想定した共同の上陸作戦訓練、銃を構えて匍匐前進する自衛隊員の映像をながしていました。

中国や韓国との領土問題を追い風に、自民党はじめ政党、議員が憲法改正や集団的自衛権の行使を声高に主張しています。メディアは橋下徹大阪市長の、人権を無視した強引な施策の数々を封印したまま、「日本維新の会」を第三極ともてはやしています。

いっと引き寄せるかということが、これからのたたかいだろうと思います。」と述べています。誠実に日本語で話すアーサーさんの講演をお楽しみに！

日時 11月23日(金・祝)

午後1時半～3時半

場所 野田市南部梅郷公民館 講堂

開催協力券 700円

(呼びかけ人・事務局が持っています)

*チラシ作成中です。チラシの2面に野田・九条の会の今年のアピールを印刷、4万枚を新聞に11月半ばに折り込みます。これらの費用は年1回皆さんにお願ひしている賛同金でまかさないます。開催協力券は講師代に当てられます。ご協力お願いします。

映像の手法のように国家、国益がクロ

ーズアップされ、何よりも尊重され、守られるべき個人がフェードアウトされていくような気味の悪さを感じます。

けやき九条の会では、このような日本

の今が1873年の徴兵令制定から日清、日露戦争を経て15年戦争に突き進んでしまった歩みと、重なってはいはしないのか、いるとしたらどこでどのように重なっているのか、歴史を遡って勉強することにしました。

公演中のアーサー・ビナードさん



今月の予定

- 10月9日(火)4時 チラシ配布 梅郷駅
 - 10月13日(土)2時 定例会 北コミュニティセンター和室
 - 10月14日(日)2時 南9条 DVD上映会
- 「私」を生きる 野田南部梅郷公民館

そこから9条を守り、実現していく道筋がつかめるのではないかと。

第1回「日本の軍隊―兵士たちの近代史」吉田 裕著 岩波新書のレポート

10月17日(水)1時 田中さん方(清水5-1) (いつもは樺のホールです。)

いつもお団子の差し入れでお茶を飲みながら、憂さ晴らしも兼ねた楽しい会です。どなたも大歓迎です。ぜひ一度のぞいてみてください。

連絡先 富村(TEL 71254153)

九条の眼

オスプレイ 普天間配備強行

「もうやめて！！限界です」

わたしたちは、この沖縄の声に、怒りと悲しみに

真正面向き合ってきたか、向き合っているか。

○ 届かぬ民意

怒りと悲しみに震える沖縄

米海兵隊の垂直離着陸輸送機MV22オスプレイ9機が1日から2日にかけて岩国基地から相次ぎ離陸、普天間飛行場に着陸しました。

飛行場周辺では1日早朝からたくさんの方が集まりオスプレイ配備に反対する抗議行動を展開。野嵩ゲートでの抗議集会では翁長雄志那覇市長が「怒りと悲しみが交錯しながらここに立っている。知事、県議会、41市町村長、41市町村議会の決意と、(9日の県民大会に集まった)10万人を超える人々の思いがある。これでも配備することが他の都道府県でもあり得るのか」と積りにつもった怒りを訴えました。



○ 憲法に守られなかった沖縄

そして今も続く日本の構造的差別…

太平洋戦争末期、沖縄は本土の捨て石にされて、県民の四人に一人が命を奪われました。その上戦後は、平和憲法のもと復興繁栄に向かう日本から切り離されて、アメリカの占領下におかれ、戦争をするための「基地の島」として本土とは異なる過酷な道を歩むことになってしまいました。

本土では砂川はじめ各地で反米、反基地闘争が激化し、60年の安保改定までに米軍基地は4分の1に減少しました。

一方沖縄では軍事優先・反共政策により、軍用地の強制接收や政治的弾圧を受け、1952年安保条約～60年安保改定の間米軍基地は2倍に膨れ上がり、日本全土の面積の0.6%にすぎない沖縄の基地密度は本土の100倍にもなりました。

60年の新安保条約により日本は、平和憲法の外に置いた沖縄の基地化を進め、軍事面でアメリカに依存することによって経済発展の道を進みます。

こうして日本全体の米軍基地の74%が沖縄に集中し、沖縄は安保体制を外から支える理不尽な役割を担わ

せられることになりました。

71年には、日米両政府が沖縄返還協定を調印しますが返還直前、本土の海兵隊のほとんどを駆け込み的に沖縄に移駐させてしまい現在に至っています。27年も経た1972年、沖縄の施政権は日本に返還されました。

沖縄の人々の願いは、平和憲法下の日本へ復帰することで、基地被害の苦しみから開放され平穏な暮らしを取り戻すことでした。日本政府によれば、沖縄の基地は「速やかな将来に整理・縮小」されるはずでした。しかし日米両政府は、基地の自由使用や米軍施設の維持経費負担の密約を結んでおり、「核抜き・本土並み」の返還は虚像だったのです。「基地の島」には何の変化もなく、沖縄は現在に至るまで日本本土とは異なる不平等な扱いに苦しんでいます。

この差別構造上に、オスプレイが強行配備され、沖縄から、「もう限界です！」の悲痛な叫びが発せられています。この叫びは決して日米両政府にのみ向けられているのではないことは沖縄の、新聞はじめ様々な人々の声に明らかです。

出撃拠点と兵站拠点の役割も果たす沖縄の基地

[...]ヤマトウでは、福島第一原発の事故によって自分たちの生活が脅かされるに至り反原発運動が盛り上がっている。しかし、米軍基地問題に関しては、大方は相も変わらず他人事のようなだ。

MV22オスプレイの配備に対して、事故の多さから安全面での不安と爆音問題が取り沙汰される。それは当然なことではあるが、同時にもっと取り上げられるべきなのは、航続距離や輸送能力の向上によって在沖米軍基地の侵略・攻撃能力が上がることだ。日本の防衛のために沖縄の米軍基地があるかのように言われるが、朝鮮、ベトナム、イラク、アフガニスタンで米軍が何をしてきたかを見れば、沖縄の基地は侵略のための出撃拠点と兵站拠点の役割を果たし、さらに殺戮の技能を上げる訓練の場としてあったのだ。

殺される側からすれば、沖縄は「悪魔の島」だったのであり、MV22オスプレイの配備は、悪魔の翼がより強力になるということだ。米軍基地から派生する事件や事故の被害を拒否するだけでなく、基地を容認することで加害の立場に立つことも拒否する。そういう運動を大きく作り出すことは、沖縄県民だけに課せられた課題ではないはずだ。「沖縄問題」という問題はない。あるのは日本(ヤマトウ)問題である。

目取真俊「海鳴りの島から」抄出 2011・6・30